

生活の中の
仏教語

『歎異抄』のことば 一猫をなでながら一

ほっと通信編集委員 佐藤徳郎（釈 徳法）

一カ月ほど前、我が家の庭に子猫が一匹迷い込んできました。痩せて毛並みも悪く、まだ親猫が恋しそうな黒猫です。どうやら捨て猫か親猫に育児放棄された野良猫のようでした。初めは人間を警戒していたものの、毎日餌をやっているうちにすっかりなついてきたので、家猫として飼うことにしました。この頃は、私が机で本を読んだり書き物をしていると、膝の上に乗ってくるようになりました。さっきから私の膝の上で丸くなっている猫の体をなでながら、その温かさを感じ、「ああ、お前も生きてるんだな」と思ったとき、ふと『歎異抄』の一節が頭に浮かびました。

それは、「一切の有情（うじょう）は みなもつて世々生々（せぜしょうじょう）の父母（ぶも）兄弟なり」というもので、第五条の中にある親鸞の言葉です。『歎異抄』は、浄土真宗を開いた親鸞から直接教えを受けた門弟、唯円（ゆいえん）によって、今から約 740 年前、鎌倉時代に著わされた書物で、唯円が親鸞から聞いた言葉が数多くしるされています。この一節を、作家の五木寛之は「あらゆるいのちあるものは、くり返しくり返し生まれ変わり、生き変わりするなかで、すべてがつながっていくのだ。だからいのちあるもののぜんぶが父母であり、肉親、兄弟姉妹であり、生きるものすべてが家族である」と現代語に訳しています（五木寛之『私訳歎異抄』）。これは、仏教でいう「六道輪廻」の思想であり、一切の衆生が輪廻の長い流転のなかで相互に関連しているのだという、人間に対する見方でもあります。六道輪廻の話など信じられないという人でも、たとえば、奈良時代の僧侶で行基菩薩とも言われた行基の作とされる「山鳥のほろほろと鳴く声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」という歌には、少なからず共感できる点があるのではないのでしょうか。

たしかに、現実には、父も母もそれぞれがただ一人の存在です。しかし、父母の

父母、そのまた父母の存在がなければ、私は生まれてこなかった。そのように考えていくと、私という存在があるためには、気の遠くなるような数の祖先が必要であったということに思いあたります。私たちは、遠い過去から無数のいのちのつながりのなかに生きているのです。

そのことに気づくと、私の膝の上で気持ちよさそうに眠っている子猫にも、この世界で出会ったことの「ご縁」の不思議さを感じ、何ともいとおしく思えてくるのです。

北海道小樽市 真宗木辺派潜龍寺衆徒
宮城県石巻市在住

(979字)